

9. 神話と伝説

最近はしょっちゅう誰かが神話を語っているが、かれらは科学の知識を使って、歴史の研究としてではなく、法律の判断を下し、神話は全て荒唐無稽の話であって、研究の価値がないばかりか、排斥する必要があると考えている。こうした意見は実は誤りだと言わざるを得ない。神話の民俗学研究においての価値はすでに知っている人は多いが、文芸方面にもとても関係がある。今しばらくこの面について少し説明してみよう。

神話という大同小異のものは、だいたいその性質によって次の四種に分けられる。

1. 神話 (Mythos=Myth)
2. 伝説 (Saga=Legend)
3. 物語 (Logos=Anecdote)
4. 童話 (Maerchen=Fairytale)

神話と伝説の形式は同じあるが、神話で語られるのは神のことであり、伝説は人間のことである。その性質の一つは宗教的、一つは歴史的である。伝説と物語もまた同様だが、伝説で語られるのは半神の英雄で、物語で語られるのは世の中の有名人であり、その性質の一つは歴史的、一つは伝記的である。この三種は一類とすることができ、人と事がともに重んじられ、時と場所もまた多くは落ち着くところがあり、事柄を重んじ人に重きを置かない童話とは対照的である。童話の性質は文学的で、上の三種が別の面から文学に入ったのとは違う。しかしこれはそれらのもともとの性質上の区別にすぎなくて、そのなかの成分については別にそれほどの大差はなく、われわれがいま鑑賞するばあい、さらにもともとと同じ文芸作品としてであって、軽重を分けることはできない。

神話など中間にある怪誕の分子については、古来注目する人が多く、さまざまな解説が加えられているが、いずれもあまり確実ではなく、十九世紀末のイギリス人アンドリュー・ラング (Andrew Lang) が人類学の方法で解釈するようになって、ようやく豁然と貫通するに至り、現代の民俗学者に採用されている。新旧の学説はすべて五家で、退化説と進化説の二派に分けられる。

退化説

- (一) 歴史学派 この派の学説はあらゆる神話は皆歴史的事実に基づき、年代が久遠なため、訛伝して怪誕に流れたとする。
- (二) 比喻派 この派は神話などは具体的な事物を借りて、抽象的な道德教訓を寄託したもので、訛伝によってその本意を失い怪誕の物語になったという。
- (三) 神学派 この派は神話などはみな『旧約』の物語の変化したものと言う。
- (四) 言語学派 この派は神話などはみな“言語の病”に起源し、自然現象をもって一切を解釈すると言う。彼らは自然現象にはもともと多くの名前があり、後になって古い名が廃棄されて成語が流存し、意味がすでに不明になって、そこで神霊の名だと考え、一切の神話の根源となったと考える。以上四派の中ではこの派が最も勢力があり、人類学派が起るに至って、ようやく打ち倒された。

進化説

(五)人類学派 この派は人類学を根拠とし、一切の神話などの起源は習俗にあることを証明する。現代の文明人が怪誕だと思ふ物語は、それが発生した時と場所においては、まさに社会的な思想・制度と調和していて、何の齟齬も感じない。たとえば人獣通婚は、でたらめな思想のように見えるが、人と物とが皆精霊であつて、互いに形態を交換できると信じていた社会にあつては、当然のこと奇異とは考えない。彼らは古代或いは蛮族及び郷土の民の信仰と習慣から証拠を引き出し、各種の神話の原始を考証して、概ねは既に解決を見た。

われわれはこの人類学派の学説によって、正当に神話の意味を理解し、それが決して完全には荒唐不經なものではなく、決して特殊な階級の何人かの人間が勝手に編み出して、愚民化に用いたりしたものではなく、さらにまた大人が口からでまかせを言って子供を騙そうとしたものでもないことを知ることができる。われわれにこの予備知識があれば、文学上の神話を鑑賞する資格ができる。たとえば古代ギリシアのいわゆるホーマーの史詩には、多くの“無稽”な話が満ちているが、この方面から見るのでなければ解釈のしようがない。本当に人を食う“丸い目”(Kyklops)はいるのか。イタカの太上皇が本当に自分で畑を耕していたのか。いずれも無稽の問題のようだが、ラング氏の学説を参照して読めば、決して無稽でないばかりか、却つてとても面白く感じられる。

科学的な解説を離れて、単に文学の立場から見ても、神話にはやはり自ずからその独立した価値があり、軽蔑できないものである。本来は現在のいわゆる神話などは、もともと文学であつて、古代の原始民の史詩・史伝及び小説の中から出たものである。彼らがこうしたものを作つたのは、わざと偽作して民衆を騙そうとしたのではなく、実はただ真面目に彼らの質朴な感想を、その内容と外形がどんなに奇異であるかに関係なく、表現したに過ぎない。しかし自己を表現するという点では現代人の著作と何の距離もない。文学の進化では、連続する反動(つまり運動)がさまざまな流派を形成するけれども、根本的な人間性のようなものは変化がなく、各派に共通する文芸の力は、同じように人を感動させるし、区々たる時間と空間の隔ては表面的な異様な文様を加えるだけで、その波動を遮ることはできない。中国の望夫石の伝説は、ギリシア神話のニオベ(Niobe)が子どもを悼んで石になる話とともに、いま科学の眼光で見れば、すべてでたらめだが、これはその文芸的価値においては決して損なわれることはない。なぜならそれが与えるものは決して人間が石になるという事実ではなく、死よりももっと強い男女間及び母子間の愛情であつて、石に化すという言葉はほとんど文芸上の象徴作用となっている。文芸が歴史あるいは科学の記載ではないことは、誰でも知っている。化石の物語を見て、人間が本当に石になると信ずるのは、もちろん愚人であり、あるいは科学を背負つて迷信を打破しようと、侃々諤々と化石の物語の不合理的を議論するのも、やはり阿呆たるを免れない。我々は決して事実の上で人が石に変われることを信じないが、望夫石等の物語の中で、それは一種の心情を表示でき、自ずから特殊な光熱を持ち、科学の問題を離れて、その美しさを理解し鑑賞できると思う。文学を研究する人間は現代の科学知識を運用して、文学の成分を分析し、時代の背景を、個人の生活と心理の動因を探り、きわめて精密な研究をすることができるが、ただ文芸そのものの鑑賞においては、これを一人の

個人の心——つまり科学の洗礼を受けても依然としてものに捉われない感情であって、科学知識そのものではない——に求めざるを得ない。中国ではなんでも両極端が多すぎる。一部の人は今でもまだ神話の中の信仰をいだいており、一部の人は神話を科学に合わないでたらめだとして、排斥せずんば止まない。わたしは神話などを崇信と攻撃の外に取り出し、それを中立の位置に戻して、学術的考察を加え、文化史の中に戻す一方、古代文学と見なして、歴史批評や芸術鑑賞をもって待遇すれば、相当良好な結果を獲得できると思う。この方法は、まずは妥当であり、また神話に対する世界共通の方法でもある。広大な肥えた畑がそこに広がり、ただ人間が耕すのを待っている。国内に労苦と寂寞に耐えられるそのような農夫はいないのか。

本文では神話・伝説・物語・童話の四種を列挙したのに、表題を神話と伝説だけにしたのは、後でもまた神話だけを挙げたが、実はすべて四者を包括しているので、便宜上簡略にしたまでである。

※初出：1922年6月26日『農報副刊』